

民俗博物館だより

Vol. X XIII No. 1

1996. 8. 31



百鬼夜行之図（愛知・西尾市教育委員会蔵〈岩瀬文庫〉）▲

目 次

特別テーマ展紹介

「鬼の世界—信仰・行事習俗に現れる鬼の諸相—」……………1

研究ノート

近世まじない習俗の伝承について……………4

民俗資料伝承調査について(2)……………7

お知らせ……………7

「鬼の世界—信仰・行事習俗に現れる鬼の諸相—」

【期間】平成8年9月21日 — 平成8年11月17日 奥野義雄

はじめに

私たちの暮らしの中には、いまでも数多くの「鬼」たちが息づいている。これらの「鬼」の多くは、古く奈良時代以前に息づき、今日に至るものもある。

このような「鬼」たちの生い立ち、すなわち古代以前から現在までの「鬼」の生成や「鬼」の社会的展開についての研究は、「鬼」への〈想い〉を基調としたものであったと言えよう。ただ、いくつかの研究業績が公にされてきたが、「鬼とは何か」という基本的な課題については、今日まで積み残されてきたと言えるであろう。しかしながら、鬼の研究によって、時代や社会の流れの中で、さらに人びとの生活のなかでうごめく「鬼」たちの姿・形が、次第に明らかになってきたことは事実である。※

今回の特別テーマ展では、人びとの生活の中に溶け込んでいる「鬼」、とくに信仰と行事に現れる「鬼たち」のさまざまな姿・形を紹介し、鬼のもつ両極（善・悪）の要素についても触れながら、あらためて「鬼の世界」と「人の世界」の交流があつたことを理解する契機としたいと考えている。

1) さまざまな鬼の姿・形コーナー

古代、飛鳥・奈良時代以来、「鬼」への恐れや崇敬の〈想い〉は、人びとによって、時代とともに培われてきた。そして、「鬼」への〈想い〉は、具体的な姿・形に現され、描き出されてきたのである。

たとえば、具体的に姿・形を表現してきた多くの「鬼」は、都城や寺院を護ってくれる屋根に葺かれている鬼瓦や屋根の軒を飾る軒丸瓦などに用いられている。

また、さまざまな〈符呪〉の書物に見える呪符の中にも、「鬼」が文字として、あるいは図柄として、呪術的な信仰＝まじない習俗の中に息づいている。

さらに、修正会、練供養会式、秋祭などの年中行事の中でも、「鬼」が活躍してきた。鬼は、行事の主役として現れるときと行事を引き立たせる脇役として現れるときがある。

このように具現化された「鬼」とは別に、人びとの「鬼」への想いは、伝説や昔話に現れてきた「鬼」に対しても、言い伝えの中で表現されながらも、次第に具体的に描かれるようになっていった。

時を越えて、人々の「鬼」への想いは、その後の社会へも受け継がれていった。屋根瓦の「鬼」、呪符の「鬼」、祭礼や行事の「鬼」

とともに、絵画、彫刻、そして玩具・遊戯の類にまで及んでいく。

このように「鬼」に対する人々の想いは、時代・社会の移り変わりとともに古代の人びとが描いた「鬼」の概念から次第に広がってきたのである。それは、「鬼の（棲む）世界」が徐々に広がっていったことを示唆している。

このコーナーでは、古代以来の「鬼」が、あらゆる場で具現化されていることを、出品資料によって紹介する。

2) 信仰にみる鬼の諸相コーナー

古代の人びとは、目に見えない疫鬼＝悪鬼に対して恐れを抱き、これに対して崇敬しながら、疫鬼が引き起こす災い——疫病、災害など——から逃れることを祈り願ったのであった。疫鬼を避けるための呪符は、古代の人びとにとって不可欠な信仰の祭具であったといえよう。「鬼」の文字が書き込まれた「まじない」の札を用いる〈符呪〉は、古代以来おこなわれてきた信仰習俗の一つであり、今日でも生活の中で「まじない」の札＝呪符には、神祇的あるいは呪術的な習俗が溶け込んでいる。

また、「神」と「鬼」とのかかわりを示す行事の中には、信仰を土台にしたものが少なくない。たとえば、鳥羽市国崎のノット正月



▲ 『日本書紀』（奈良県立図書館蔵）



▲ 古代の鬼瓦（奈良国立文化財研究所蔵）

は、ツメと呼ばれる「咄呷囁鬼神」と書かれた札=呪符を海辺の砂や藁船に挿して、供物を供えて、今年の無事を祈る行事であるが、そこには〈歳徳神〉=神に祈願する信仰が基盤になっている。

一方、神への信仰に対して、仏教が伝来して以後、恵信僧都源信の著した『往生要集』を契機に、極楽と地獄の思想が流布し、「地獄」には「鬼」が現れるようになっていく。鬼は、閻魔大王の従者として大王の命令によって、直接裁きをおこなう。たとえば、地獄での裁きをおこなう閻魔大王以下、九名の大王を大きく描いた「十王図」、地獄と鬼の様子を描いた「地獄図」や「往生図」などがある。

このように神・仏の信仰にかかわる鬼たちは、次第に多様化した世界で活躍するようになる。この「信仰の鬼の諸相」のコーナーでは、出品資・史料から、信仰の場での多様化した鬼たちの状況が理解し得る。

3) 行事に現れる鬼たちコーナー

祭礼・年中行事に現れる「鬼」は、古代の宮中行事の中に見られる。たとえば、十二月晦日に、宮中でおこなわれる追儺には、鬼が現れて方相氏によって退治されるという筋書きの行事がある。また、正月には、大寺院で修正月=修正会が営まれる。この修正会にも、

鬼が現れて毘沙門天によって退治される。これらの鬼は、新年(春)迎えの行事に現れる「鬼」であり、鬼すなわち疫鬼(悪鬼)を退治すべき行事あるいは鬼自身によって疫病などを流行させる疫鬼を退散させる行事として位置づけられていたようである。これらの行事は古代から今日に至るまで受け継がれてきているが、追儺の鬼は、具象化されない節分の「鬼」と重なり合って、「節分の鬼」という概念が生じている。たとえば、この「節分の鬼」は、奈良県下では興福寺や法隆寺、そして県外では京都・吉田神社や八尾・天満宮などで見られる。

また、修正会の鬼は、かつて寺院の修正会に鬼が現れていたものが、その大半は消え去ってしまったようである。だが、県内では、五條市大津の念仏寺陀々堂の修正会・鬼走りが遺っているのである。そして、修二会の行事と考えられている桜井市の長谷寺のだだ押し法要もある(修正会では?)。

一方、春さきの行事以外にも、「鬼」が現れる行事は県内外に見られる。その行事の中には、寺院縁起とかかわるもの、修験道の逸話とかかわるものなどがある。たとえば、満米上人の地獄見聞を素材とした矢田寺(金剛山寺)二十五菩薩練供養会式、地蔵菩薩の靈験を再現した八尾・常光寺地蔵会式練供養、そして上野・菅原神社の天神祭りの鬼行列などがある。県内外を問わず、これらの行事以外にも「鬼」が現れる行事があるが、二・三の「鬼」にかかわる行事を掲げる。

たとえば、愛知県の花祭りには、鬼が現れて踊りを演じる。また、京都のやすらい祭りにも鬼が行列に加わる。

このように〈鬼の世界〉は行事の中でも、両極(善悪)の鬼によって、彼ら自身が表現し得る〈場〉を持ち、祭りを盛り上げているように見える。

この「行事に現れる鬼たち」のコーナーでは、出品された県内外の「鬼」をともなう行事から、行事に現れる鬼たちの様子を紹介する。

※日本の「鬼」に関する研究書(文献図書)

- ① 島津基久『羅生門の鬼』
- ② 江馬 務『日本妖怪変化史』
- ③ 馬場あき子『鬼の研究』
- ④ 五来 重『鬼むかし』
- ⑤ 田中貴子『百鬼夜行の見える都市』
- ⑥ 福田 晃『京都の伝承を訪ねて』
- ⑦ 多賀 潤『王朝期の鬼考』

★とくに、鬼の研究を精力的にされてきた馬場あき子氏は、『鬼の研究』の「はじめに」のところで「鬼とは何か。鬼の範疇にはなお未確認の部分が多く残っている」と述べている。



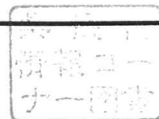
◀ (愛知・西尾市教育委員会蔵)
百鬼夜行画卷

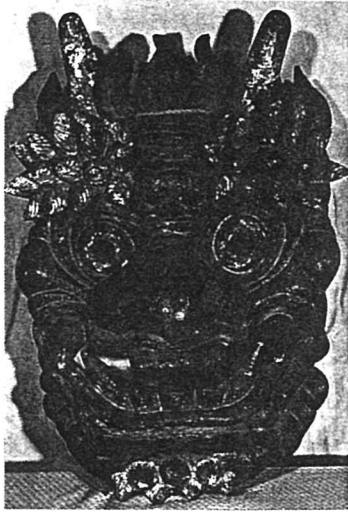


◀ (八尾・常光寺蔵)
往生図掛軸



◀ (広陵町古寺区蔵)
地獄絵掛軸





◀ 五條・念仏寺鬼走り鬼面（念仏寺蔵）



◀ 天満宮追儺鬼面（八尾・天満宮蔵）



◀ 長谷寺だだ押し鬼面（長谷寺蔵）



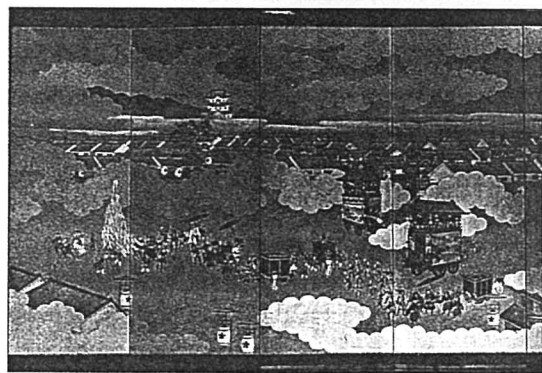
▲ 矢田寺練供養絵巻（金剛山寺南僧坊蔵）



◀ 天神祭り鬼行列追儺面（上野市紺屋町自治会蔵）



◀ 興福寺追儺会鬼面（興福寺蔵）



▲ 天神祭り・祭礼屏風（上野市・菅原神社蔵）

近世まじない習俗の伝承について

— 『諸国風俗問状答』の二・三の事例を中心にして— 奥野義雄

私たちの周縁から消えつつある習俗は数多くある。その一つとして〈まじない習俗〉を挙げることができよう。そして、この〈まじない習俗〉も、ほかの多くの習俗と同様に、その源流を古代にまで遡り得るものもある。さらに、習俗の創出を中世に求めることもできるであろう。

このように〈まじない習俗〉の源流や創草の時期についての究明が進んできている反面、現代社会にもっとも近い近世における〈まじない習俗〉を基軸にして、その前後の時期あるいは古代（中世）、—近世—現代との繋りや習俗伝承について検討した論考はあまりみられないようである。

ただ、考古学の視点で現今の習俗を援用しながら古代の〈まじない習俗〉を位置づけようとする水野正好氏の「招福・除災—その考古学—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第7所収）などの論考があるが、古代・中世の〈まじない習俗〉を基軸とした論究である。

たしかに、古代を、あるいは近世を基軸にしたとしても、〈まじない習俗〉の習俗伝承は語り得る。言い換えると、古代→中世→近世→近代という経緯による習俗伝承を辿るか、近代→近世→中世→古代という順序で習俗伝承を捉えるかという違いだけであり、それぞれの時期における習俗がいかに伝承されてきたかという点では同じであるかもしれない。

たとえば、六月祓を掲げて、祓にみられる〈まじない習俗〉をみると、

大麻・木製人形代・(小型?)茅輪—古代
 ↓ ↑
 大麻?・木製人形代・(小型?)茅輪—中世(前)
 ↓ ↑
 大麻?・木製人形代・(大型?)茅輪—中世(後)
 ↓ ↑

紙製人形代・大型茅輪—近世～近代という若干の変化をみせる人形代をともなう〈まじない習俗〉が大雑把に窺える。

このように〈まじない習俗〉を古代あるいは近世を基点に考えると、その習俗伝

承の経緯は理解し得る。

しかしながら、この六月祓を例に挙げると、個々の名称や内容に変化がみられるのである。古代では「大祓」と称し、中世では「六月祓」「夏越祓」と呼び、近世以降では「夏越祓」が定着し、「輪くぐり」「茅輪くぐり」と呼称することもある。また、茅輪自体が小型から大型へと変化していくことも留意すべきであろう。

したがって、近世を基点として〈まじない習俗〉を考えていく場合、古代あるいは中世とは異なり、習俗伝承は多種多様化していくことに気づく（この多様化の土台には、それぞれの村落共同体の要求が根底にあることを念頭におくべきである）。

そこで、ここでは近世を軸に〈まじない習俗〉のいくつかを掲げながら、古代あるいは中世と対比しつつ習俗伝承について垣間見ていきたい。

* * *

日本各地の風俗・習慣について記載されている諸国の『風俗問状答』を中心に、近世の〈まじない習俗〉を窺うことから始めよう。

諸国の『風俗問状答』にみる〈まじない習俗〉には、農耕儀礼をはじめ、産育、年中行事、疾疫（病気）平癒などの生活に直接かわるものが少なくない。

まず、農耕儀礼にともなう〈まじない習俗〉から繻くと、蝗や風による害を防ぐものがみられる。

蝗の害を防ぐ〈まじない習俗〉については、すでに述べたことがあるので、ここでは詳しい検討をさけることにする（「蝗の害を避けるまつりとまじない—虫送りの習俗の展開をさぐる—」〔『民俗博物館だより』通巻第68号所収）。

ただ、蝗の害を防ぐ〈まじない〉には、別稿では触れなかった記載の一・二の事例を次に掲げることにとどめたい。

【奥州白河風俗問状答】の「蝗風をさくるまじなひの事」の項に、

蝗を*さくるには水口に鯨の油を少しさし候へ共、駢と土地のならはしと申ほどにも無之、其外色々呪事等有之由に候へども、土地限の事とも不聞に付省略いたし候。

とあり(※「さくる」=「避ける」)、蝗を避るべきくまじないはほかにも種々あったことが窺える。

また、『淡路國風俗問狀答』の「蝗風等を避る咒の事」の項には、呪符(守札)と呪歌が記載されている。すなわち、

鳥飼下村、實盛の社六月初亥日蝗除祭にて、鏡餅、洗米、神酒等供ふ、左の守札を參詣人受戻り田畝に建つ。鳥飼上中下三ヶ村は、右亥日に虫送をす。

(守札の図略す)

右實盛社守札の事、乗穂録にも見えたり尾州人作合せ見るべし。

鮎原組の村々には、咒の歌あり

へこちとらを虫といへども米つくり、天か下なる人を育る

へ百姓はいつち大事の物じやぞよ、人の命の種を植れば、

とあり、蝗を避るべき呪符と呪歌を淡路國(現淡路島)の村々で用いていたことが窺えるのである。

しかし、この呪符と呪歌が古代あるいは中世まで遡り得るものか、否かは明らかにしがたい。ただ、蝗の害を避けるべき習俗は、すでに述べたとおり、古代にまで遡ることができ、〈祈祷〉によって蝗を避けることを提示しておいた。

蝗の害を避けるくまじない習俗)については二つの事例にとどめるが、農耕儀礼にかかわるくまじない習俗)として興味深い記述が、『越後長岡領風俗問狀答』の二月朔日の項にみえる。すなわち、

此日農家にて年中場に纏れちりたる米を團子に調し、赤小豆をつけて喰ふ。是を土生團子といふ。又、牛馬鶏杯の形を作り戸ぶちに飾る。如何故といふを知り侍らずかし。土牛を作りて寒を送るという遺風に也。

とあり、牛馬や鶏の杯の形を戸口に飾る風習が土牛の形代をもって寒を送る遺風らしいと考えていたようである。牛馬や鶏の杯の形状のものを戸口に飾ることが農家でおこなわれていた意図と寒を送る遺風に土牛の形代を飾

る意図とが重なりあう接点は、農耕に求められるようである。この点については、近世以前の土牛と寒送りと農耕との繋りを示す史料を繙いてみることにしよう。

『延喜式』(巻16)の「陰陽寮」のところに、

凡土牛童子等像。請内匠寮。大寒之日前夜半時立於諸門。(割註略)。立春之日前夜半時乃撤。

とあり、土牛童子などの像を、大寒の日前夜半に諸門一陽明門、待賢門、美福門、朱雀門、他一へ立てたことが窺える。

また、『延喜式』(巻17)の「内匠寮」のところに、

大寒日立諸門土隅人十二枚。各高二尺。土牛十二頭。各高二尺。料。青土二升。赤二升。白二升。黄四升。(下略)

と記載され、人形代(土製)とともに土牛が大寒日に諸門に立てられたのである。しかし、大寒一土牛の線上に農耕とのかかわりは明確でない。

ただ、古代の宮廷における大寒を送る行事習俗として、土牛を立てたことは確かな事実であり、古代から近世に至る悠久の年月にもかかわらず伝承されていたことがわかる。

このことは、伝承されてきた事象を実証すべき記録や文献史料があれば、伝承の正確さあるいは不正確さが検証されることを明示しているといえる。

このくまじない習俗)とともに、『和歌山風俗問狀答』の「七月」の項に、農作物に蟲が付かないくまじない習俗)の記載があり、そこに「農人形、松明を燈し、火おくりとして田畑へ振廻し通る」とあり、「農人形(人形代)」を用いていたことが窺える。

さらに、後に触れる疫病流行にともなうくまじない習俗)に人形代が用いられていることを、同『風俗問狀答』によって知り得る。すなわち、「農家に疫病流行の時、疫神をおくるとて藁にて、人がたをこしらへ、太鼓、鉦など叩きおくり捨ておく」とあり、送るべき対象は異なるが、〈人形代〉が行事の主体となっていたのである。

併せて言及するなら、共通する〈人形代〉以外は、蟲の場合には松明を用いて、疫神の場合には太鼓と鉦を使うという相異した点が

みられる。

このことはともかく、各地の農耕儀礼にと
もなう〈まじない習俗〉には、古代以降、近
世に至っても息きづいていることがわかる。

では、この〈まじない習俗〉以外に、どの
ようなものがあるのかを、諸国の『風俗問状
答』から窺ってみよう。

* * *

諸国『風俗問状答』で目につく〈まじない
習俗〉は疫病に関するものである。そして、
ここでは触れないが、産後の胞衣や産所にか
かわる〈まじない習俗〉も記述されている。

まず、疫病に関する〈まじない習俗〉から
窺っていくことにしよう。

『奥州白川風俗問状答』の「疫病除の事」
の項に

疫病有之、村方にては寺院相頼大般若轉讀
等いたし、或は疫神送りとて禰宜山伏等相
頼祈禱いたし、藁にて人形あるひは鍵薙刀
太刀等の類を拵へ、農人大勢集り向ふに人
家無之方の村境まで送り申候。

とあり、疫病を司る疫神を送るために大般若
經の転読あるいは祈禱をおこない、さらに藁
の人形代などを用いて村境へと向う村人の様
子が窺える。この疫神送りの様は、すでに触
れた現今の“虫送り”の様態によく似ている
といえる。

また、『越後長岡領風俗問状等』の「疫病
除の事」の項には、人形代を用いるのではな
く、呪符や呪物を用いていたことがその記述
からわかる。すなわち、

門に仏神の靈符をおし、又弓鐵砲的、或
は蒜鮑くわのから馬の沓などを赴く。其外修験
者疫神除とて、時に付てのわざと見ゆれど
定れる作法もなし。

とあり、「靈符」や「にんくわび的、或は蒜鮑くわのから
(殼)」「馬の沓」などの〈まじない〉として
使っていたことがわかる。そして修験者による
疫神除けの呪法もおこなわれていたことも
窺える。

越後国長岡領内での疫病除けの〈まじない
習俗〉にみる鮑の殼が呪物に用いられる事例
は、現今の習俗にもみられる。たとえば、近
年まで岡山県内では、麻疹＝ハシカ除けのた
めに家の戸口・軒に鮑の殼を吊り下げていた
風習があったようである。この場合、鮑の殼

には「鎮西八郎為朝御宿」あるいは「鎮西八
郎」とか、「ハシカオンコトワリ」とか、「子
供は留守だ」という墨書がある(桂又三郎編
『岡山文化資料』所収)。

疫病除けに呪物が用いられた風習とともに
修験者の呪法による記述は興味深い。なぜなら、
すでに触れた『奥州白川風俗問状答』の
疫病除けにも山伏による祈禱が明示されてい
て、〈まじない習俗〉に関与する民間宗教者
の存在が背景にあったことを想定される。こ
のことはともかく、疫病、つまり疱瘡除守呪
事」として、「六郎左衛門子孫也」の札が記
載されているのである。この「子孫也」とい
う文言は、「蘇民將來子孫之家也」という呪
文とかかわるものと考えられるが、「蘇民將
來」の呪符が出現した古代まで遡り得る“札”
とは考えがたい。むしろ、「蘇民將來」呪符
を、近世において模倣したものと想定し得る。

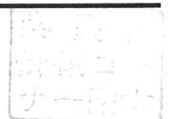
言い換えると、「六郎左衛門」云々という
“札”は、疱瘡除けの呪符として近世に創り
出された〈まじない習俗〉と民間宗教者との
かかわりは、後日検討したい課題であるが、
疫病除けに興味をひく〈まじない習俗〉の事
例が『若狭小濱風俗問状答』の「疫病の事」
にみえる。すなわち、

替りたるまじなひ無御座候、疱瘡には組屋
六郎左衛門という名札を、其家より出す。
とあり、「組屋六郎左衛門」という札を疱瘡
除けに用いたことがわかる。

そして、近世の『修験深秘行法符呪集』に
出されたものと考えられ、近世以降も伝承さ
れていったとみるべきかもしれない。

このように、近世における〈まじない習俗〉
には、古代から伝承されてきたものや近世に
創り出されたものがあり、近世以降へと伝承
されていく要素を〈まじない習俗〉には内在
しているといえよう。

胞衣・産所や寒送りに関する〈まじない習俗〉
にまで行論し得なかったが、諸国『風俗問状
答』には近世の〈まじない習俗〉が記述され
ていることを明示して結びとする。



民俗資料伝承調査について—幅広い奈良県の歴史像をめざして— (2)

2 奈良県の地域民俗文化圏の想定

浦西 勉

2 奈良県の地域民俗文化圏の想定

前号では、民俗文化財の性格と奈良県下において10ブロックの地域民俗文化圏が想定できることを述べた。

10ブロックとは、次のとおりである。

(1) ①～④ 先進地帯の農村(奈良盆地)

この地域は、長い歴史に培われてきたところである。特に、古代から条里制が敷かれ、水田開発もはやく、農業技術及びその社会は、日本でも常にきわめて最も進歩した地域であった。中世、興福寺・東大寺を中心とした強固な組織を持つ地域でもあった。江戸時代を通して、日本の進んだ農業経営が盛んに営まれた。水利慣行などきわめて密で、その機能に注目する必要がある。この地域は、①②は奈良盆地北部、③④は奈良盆地南部、大和川の北と南という分け方で、歴史的にも文化的にも相違がある。②③は大阪(河内)の影響を受けて商業化が早い。①④は伝統的な奈良盆地の農村地帯である。

(2) ⑤⑥ 高原地帯の農村(山辺・宇陀山間)

この地域は、奈良盆地に比べて少し遅れて水田開発がなされた。この地域は大和高原に当たり、奈良盆地と同じ稲作中心地帯であっても、少し異なる。稲作の期間にしても、また、裏作ができなかつたりする場合もある。⑤は高原地帯の、⑥は谷あいの農村地帯で、それぞれ歴史的にも異なる。

(3) ⑦～⑨ 吉野の山村地帯(吉野山地)

奈良県の南半分が吉野郡で、この地域は畑作中心、林業中心の集落が多い。

⑦は吉野川筋の中流・上流では少し異なる。

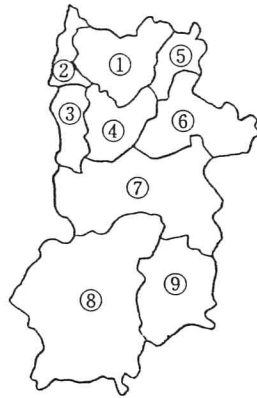
⑧は十津川筋、⑨は北山川筋でそれぞれ生活文化を異にする。

(4) ⑩ マチ

農村・山村と異にした社会として、マチがある、

以上の10ブロックを市町村名で分けると、別表の通りである。

今、このような10ブロック毎に収集した民俗資料を再度確認してゆこうとしている。そして、このような奈良県下の人々のもつ地域文化を知って学び考えることが、今日大切なのではないかと思うのである。民俗資料はその一つの素材を提供できるのである。自分の住む地域をよく知ることが何よりも重要で、それらの地域の民俗資料を通して考え、内省されたエネルギーがすべての真の文化の創造に結び付くものであると信じている。



地域名	ブロック番号	市町村名他
奈良盆地	①	奈良市 大和郡山市 天理市
	②	生駒市 三郷町 平群町 斑鳩町 安堵町
	③	上牧町 河合町 王寺町 香芝市 当麻町 大和高田市 新庄町 御所市 広陵町
	④	桜井市 橿原市 高取町 明日香村 三宅町 田原本町 川西町
大和高原	⑤	月ヶ瀬村 都祁村 山添村
	⑥	大宇陀町 菟田野町 橿原町 室生村 曾爾村 御杖村
吉野山地	⑦	五条市 黒滝村 大淀町 下市町 吉野町 西吉野村 東吉野村 川上村
	⑧	天川村 大塔村 野迫川村 十津川村
	⑨	上北山村 下北山村
マチ	⑩	奈良町 郡山町 今井町 下市 上市などのマチ

— お 知 ら せ —

■ 特別テーマ展

「鬼の世界—信仰・行事習俗に現れる鬼の諸相—」
期間 9月21日(土)～11月17日(日)

■ 特別講演

「鬼のはなし」
講師 福田 晃氏 (立命館大学教授)
日時 10月13日(日) 午後2時から

■ ワークショップ「展示解説」

9月21日(土) 午後2時から
11月10日(日) 午後2時から

■ 民俗博物館講座

「民家と暮らし—その2—」募集
演題 「民家の環境」
講師 磯田憲生氏 (奈良女子大学教授)
日時 9月29日(日) 午後1時30分～3時30分
募集定員 60名
募集期間 9月3日(火)～9月17日(火)
(当日消印有効)
応募方法 往復葉書(応募は1人1枚 住所、氏名、年齢を記入)